

## 不定名詞句の指示と談話モデル

東郷 雄二

### 1. 談話モデルの概要と discourse referent

#### 1.1. 談話の指示対象 discourse referent

一般に指示の理論においては、指示対象 referent は、言語外世界に実在する対象をさすとされることが多い。

- (1) a. **The present king of France** is bold.  
b. John will marry **a French woman**.  
c. Alberta believes that **a dragon** ate her petunias.

この考え方に従うならば、a. の the present king of France は現在の共和制のフランスでは指示対象を持たず、偽の文もしくは意味のない文になる。b. は未来の事柄であり、やはり a French woman は現在の時点では指示対象を持たない。c. で Alberta が妄想を抱いているとすると a dragon も同様である。

しかし、このように指示表現と言語外的世界を直結すると、言語の働きを理解する上では不都合なことが生じる。我々は現実に存在する事物とまったく同じように、竜についても語ることができるからである。

このため現実世界に存在する事物である extralinguistic referent と区別して、言語によって表現され我々の心的表示に登録される指示対象を Karttunen<sup>1)</sup>に従って discourse referent と呼ぶ(以下随時 DR と略す)。この意味で次の文で、実在する野生の馬と実在しないユニコーンはまったく同じ discourse referent として言語的に振る舞う。

- (2) a. Bill saw **a wild horse**. **The horse** had a white mane.  
b. Bill saw **a unicorn**. **The unicorn** had a gold mane.

すべての名詞句が DR を設定するわけではない。名詞句のなかには DR を設定しないものもある。例えば述語名詞句は非指示的位置であり、DR を設定しない。

- (3) a. John is **a linguist**.  
b. John is **the best student**.

述語名詞句が DR を設定しないことは、フランス語のように性の区別がある言語で確かめることができる。照応的代名詞は述語名詞句 une vedette du cinéma と一致した女性形を取ることはできない。

- (4) Alain Delon est **une vedette du cinéma** mondialement connue. {Il / \*Elle} ...  
"A.D. is a movie star famous all over the world. {He / \*She} ... "

談話の中に DR を設定したものは、後続談話で代名詞や照応的定名詞句で受けることができる。

1) Karttunen (1976)

これが Karttunen の考えた DR 認定の基準である。

- (5) a. Bill has **a car**. {It / The car / Bill's car } is black.  
b. Bill doesn't have **a car**. \*{It / The car / Bill's car } is black. (Karttunen 1976)

否定の文脈は DR を設定しない。また次のような modal verb も DR を設定しない。

- (6) a. You must write **a letter** to your parents. \*They are expecting **the letter**.  
b. Bill can make **a kite**. \***The kite** has a long string.  
c. Mary expect to have **a baby**. \***The baby**'s name is Sue. (Karttunen, op.cit.)

ただし、modal verb の開く不透明な文脈が文を越えて連続していれば、その間だけ DR として振る舞う。これは short term referent と呼ばれている。

- (7) a. You must write **a letter** to your parents and mail **the letter** right away.  
b. John wants to catch **a fish** and eat **it** for supper.  
c. You must write **a letter** to your parents. **It** has to be sent by airmail. **The letter** must get there by tomorrow.  
d. Suppose Mary had **a car**. She takes me to work in **it**. I drive **the car** too.  
(Karttunen, op.cit.)

## 1.2. 談話モデルの概要

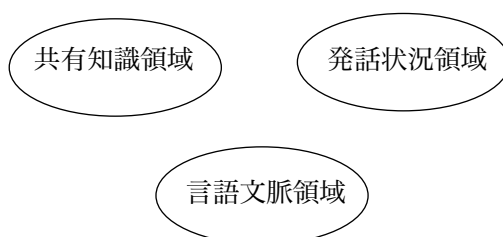
言語外的現実と関係しながらもそれからは独立して、言語表現により設定された DR が登録される心的領域を談話モデルと呼ぶ<sup>2)</sup>。

### 談話モデル Discourse Model

談話モデル Discourse Model とは、話し手と聞き手の双方が保持し、談話の構築にあたって発動される心的領域である。この心的領域は、談話の指示対象 discourse referent とそれに関する情報が格納される一種のファイルシステムである。談話モデルは次の下位領域からなる。

- a. 共有知識領域 Shared Knowledge  
b. 発話状況領域 Context of Use  
c. 言語文脈領域 Linguistic Context

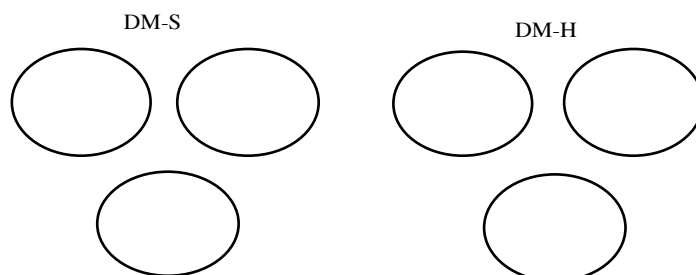
便宜的に次のように図示する。



2) 談話モデルの詳細については、東郷 (1998, 1999, 2000, 2001b) を参照のこと。

共有知識領域には、われわれが世界について持っている百科事典的知識と、話し手が個人的に経験したエピソード記憶が格納されており、初期値はゼロではない。発話状況領域は話し手と聞き手を含む発話の場の心的対応物であり、これも初期値はゼロではない。一方、言語文脈領域は談話の開始時の初期値はゼロであり、談話の進行にともなって DR とそれに関する属性情報が書き込まれていく。

この談話モデルは話し手と聞き手の双方に構築される。



DM-S は話し手の談話モデル、DM-Hは聞き手の談話モデルである。談話とは言語コミュニケーションによるこのふたつの談話モデルの調整過程と見なすことができる。またこのように考えることにより、談話に特有の「話し手と聞き手の非対称性」を表示することができる利点がある。

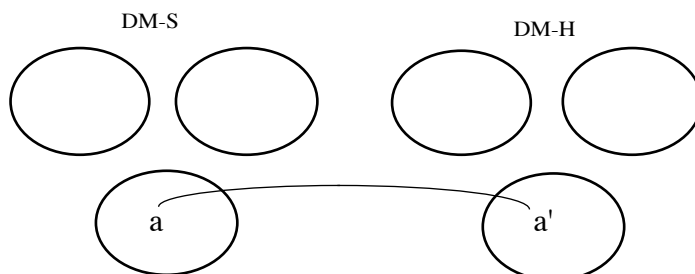
### 1.1.3. 談話モデルへのDRの登録と定・不定

談話に登場した DR は談話モデルに登録される。

- (8) a. Bill saw **a wild horse**. {It / **The horse**} had a white mane.  
 b. Bill doesn't have **a car**. \*{It / **The car**} is black.

不定名詞句 a wild house は、言語文脈領域に DR を登録する。いったん登録された DR は、後続談話において定代名詞 it や定名詞句 the house によって照応することができる。否定の文脈は DR を登録しない。このため後続談話において照応することができない。

談話モデルでは次のように図示する。



Bill saw a wild horse. という発話により、不定名詞句 a wild horse の DR の a が、DM-Sの言語文脈領域に導入される。DM-Sの言語文脈領域と DM-Hのそれとは常にコピーの関係にあるので、a の対応物である a' が DM-Hの言語文脈領域に設定される。a と a' とは同一の DR なので、この両者は同一性コネクタ (IDコネクタ) で結合されている。

次に定名詞句と代名詞の処理を見よう。定名詞句 the horse , 代名詞 it は、原則的にすでに談

話モデルに登録済みの DR を同定する。この場合は、言語文脈領域にすでに先行発話により登録されている a/a' をさす。このように定名詞句の基本的意味は、聞き手の談話モデルにすでに登録済みのものをさすという点である。これが定名詞句の特徴とされる「同定可能性」identifiability の本質である。

定名詞句を用いることができるかどうかは、話し手と聞き手の談話モデルの共有度に依存する。次は飼っている猫がいなくなって探している人の発話である (原文はフランス語)。

- (9) a. [妻に] Didn't you see **the cat**?  
b. [近所の人に] Didn't you see **my cat**?  
c. [通りがかりの知らない人に] Didn't you see **a cat**? (Galmiche 1979)

a. は談話モデルが高度に共有されている状態である。the cat の DR は、話し手と聞き手の共有知識領域 (のエピソード記憶領域) に登録されている。the cat はその DR をさすので、指示領域は共有知識領域である。

b. はそれより共有度が低い場合である。近所に猫は何匹もいるので、the cat だけで自分の猫を同定することはできない。この場合、話し手 I と所有形容詞により関係づけられたものとして提示されている。I は発話状況領域に存在する要素なので、my cat の同定にはこの情報が利用されている。

c. はそれよりもさらに共有度が低い場合である。この場合猫は聞き手の談話モデルのどこにも登録されていないので、定名詞句を使うことができず、新規 DR を表す不定名詞句を用いることになる。

## 2. 不透明な文脈と discourse referent

指示に関する有名な法則に、ライプニッツの法則がある。命題に含まれた指示表現を、それと等しい外延を持つ別の指示表現と置き換えても、命題の真偽値は変わらないというものである。

次の透明な文脈ではこの法則が成り立つ。

- (10) a. **Jacques Chirac** was born in 1931.  
b. **The present president of France** was born in 1931.

しかし、不透明な文脈ではこの法則が成り立たない。不透明な文脈を生むのは、want などの法助動詞と believe のような命題態度動詞であるとされている。

- (11) a. Jack doesn't know that **Phosphorus** is **Hesperus**.  
b. Jack doesn't know that **Hesperus** is **Hesperus**.  
(12) a. Oedipus wants to marry **Jocasta**.  
b. Oedipus wants to marry **his mother**.  
(13) a. Ralph believes that **the man he saw** is a spy.  
b. Ralph believes that **Ortcutt** is a spy.

不透明な文脈の問題や、それとよく似た事象様相 de re / 言表様相 de dicto の区別は、伝統的な形式意味論では演算子の作用域の問題として処理されてきた。次の Quine の例を用いて見て

みよう。

Ralph は茶色の帽子の男をスパイだと思っている。この男は Ralph が海岸で見かけた Orcutt と名乗る男と同一人物なのだが、Ralph はそのことを知らないという状況である。

- (14) a. Ralph believes that **the man in the brown hat** is a spy.  
b. (x : Ralph) (x believes [the x : man in the brown hat (x) ] [x is a spy] )

これは Ralph の信念を表す言表様相 de dicto である。定名詞句 the man in the brown hat は命題態度動詞 believe の作用域内にあり、それは「Ralph の視点から見て」茶色の帽子の男であったことになる。

- (15) a. Ralph believes that **the man seen at the beach** is a spy.  
b. (x : Ralph) (the x : man seen at the beach (x) ) (x believes [x is a spy] )

同じ状況で(15)の式は、Ralph の信念ではなく、話し手（もしくはそれ以外の第三者）の信念を表す事象様相 de re である。このとき the man seen at the beach は命題態度動詞 believe に対して広い作用域を取っている。"the man seen at the beach" という言語表現は、Ralph に帰属するのではなく、Ralph はまったく別の表現を用いてもよい。

ところが Quine によって作用域の問題とされた不透明な文脈における定名詞句の解釈は、法演算子や命題態度動詞の介在しない文脈でも同じように生じる。(16)で a. と b. ではライブニッツの法則は成り立たない。また (17)ではまだ真相を知らないオイディプスにとって a.のみが真であり、b.は真ではない。

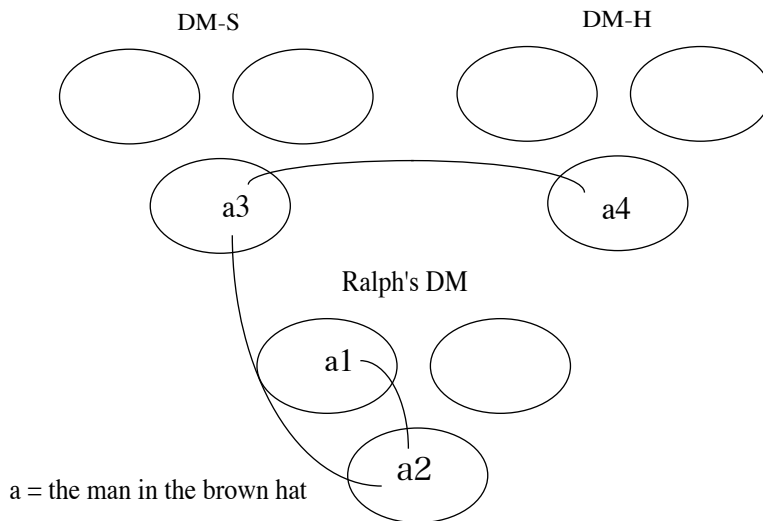
- (16) a. Everybody saw **the Superman** getting out of the phone box.  
b. Everybody saw **Clark Kent** getting out of the phone box.  
(17) a. Oedipus married **Jocasta**.  
b. Oedipus married **his mother**.

Fauconnier のメンタル・スペース理論はこのような問題を解決するために考案された。談話モデル理論もこれとよく似た処理を行なう。ただし、ここでは話し手と聞き手の談話モデル以外に、Ralph の談話モデルを設定する必要がある。

(14) a. の Ralph believes that **the man in the brown hat** is a spy.の、最も単純な de dicto 解釈は次のように表示される<sup>3)</sup>。

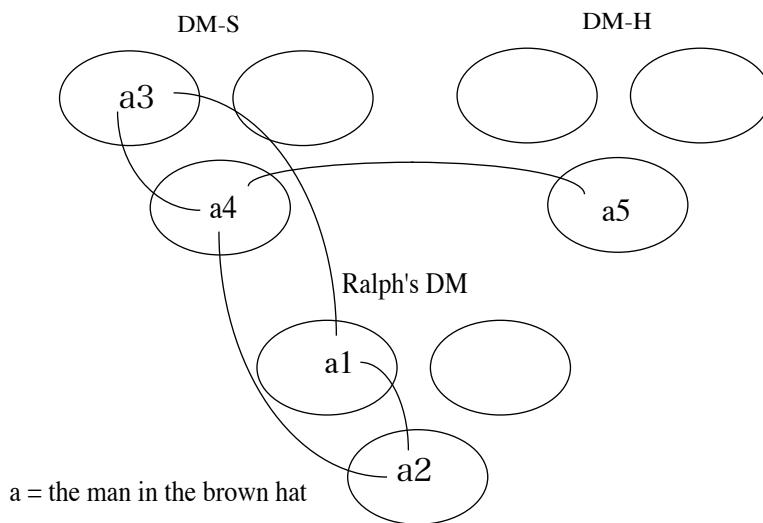
---

3) より正確には Ralph の談話モデルは、話し手の談話モデル DM-S の部分集合であり、本来は DM-S の共有知識領域内に設定されるものである。しかし、ここでは描画の都合上、独立のものとして描いておく。



a1 は Ralph の談話モデルのなかで、"the man in the brown hat" として登録されている要素を表す。Ralph は自分の発言により<sup>4)</sup>、自分の言語文脈領域にその対応物 a2 を登録する。話し手は Ralph の発言を、聞き手に単にオウム返しに繰り返しているだけなので、a2 は DM-S の a3 と ID コネクタによるリンクされ、最終的には聞き手の DM-H の言語文脈領域に a4 として登録される。

もう少し複雑なのは、話し手も "the man in the brown hat" について、本人に会ったことがあるなどして、知識がある場合である。

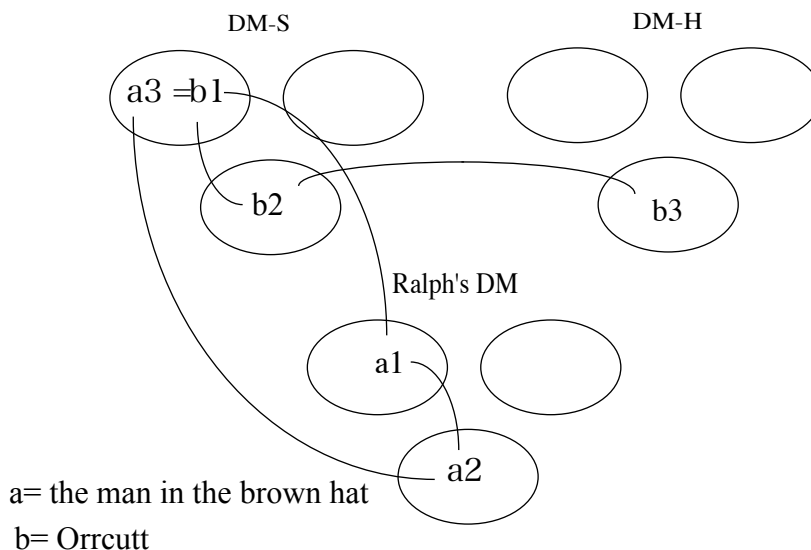


この場合には、Ralph の知っている "the man in the brown hat" (= a1) に対応する要素 a3 が、話し手の DM-S の共有知識領域内にも存在し、ID コネクタでリンクされている。

次は同じ状況で、話し手が Ralph の見た茶色の帽子の男は Orcutt だと知っていて、Ralph の発言をその事実に基づいて報告する de re 解釈である。

4) この発言はもちろん問題の文中に現れていないが、もし Ralph が話し手にそう伝えていなければ、話し手はどのようにして Ralph の信念を知ることになったのかという疑問が生じる。話し手が読心術師でもないかぎり、Ralph は言葉でそう伝えたと考えるのが妥当である。

Ralph believes that **Ortcutt** is a spy.



問題の男は Ralph の談話モデルでは a = the man in the brown hat として登録されている。この言語文脈領域での対応物 a2 は、いったん話し手の談話モデルの共有知識領域で、話し手の知識に基づいて a3 = b1 (Ortcutt) に置き換えられる。話し手はこれに基づいて "Ralph believes that Ortcutt is a spy." と de re 解釈した発言を行なうのである。

ここで注意しなくてはならないのは、de dicto 解釈でも de re 解釈でも、聞き手の談話モデル DM-H 内に登録された a4, a5, b3 は、Ralph の談話モデルとはいかなる形でもリンクされていないという点である。このため、聞き手は話し手が用いた "the man in the brown hat" / "Ortcutt" という指示表現が、話し手によって de re / de dicto のどちらのモードで使われているのかを、直接に知ることはできない。いずれの場合にも、本来 Ralph の DM 内で成立した指示表現が、話し手の DM-S を経由して聞き手に届くために、de re / de dicto の曖昧性が生じることがこれによくわかる。

### 3. 不定名詞句の指示をめぐる問題

#### 3.1. 特定解釈・非特定解釈と作用域

不定名詞句には次のようなさまざまな解釈があるとされている。

- (18) a. John caught **a fish**. [特定解釈]
- b. John wants to buy **a bicycle**. He will buy it tomorrow. [特定解釈]
- c. John wants to buy **a bicycle**. He will buy one tomorrow. [非特定解釈]
- d. John is **a teacher**. [非指示的]
- e. **A fox** is hard to catch. [総称解釈]

このうち、特定・非特定の解釈の区別は、不透明な文脈で生じるもので、名詞句に内在するものではなく、作用域の問題だとされている。次の a fish は法助動詞 want の作用域の中に含まれるとき非特定読みになり、その外にあるとき特定読みになる。

- (19) John wants to catch **a fish**.

- a. 特定解釈  $\exists x (\text{fish}(x) \wedge \text{want}[\text{John}, \text{catch}(\text{John}, x)])$
- b. 非特定解釈  $\text{want}[\text{John}, \exists x (\text{fish}(x) \wedge \text{catch}(\text{John}, x))]$

この区別は法助動詞だけでなく、内包動詞の場合にも生じる。

(20) John is looking for **a nurse**.

- a. 特定解釈  $\exists x (\text{nurse}(x) \wedge \text{look-for}(\text{John}, x))$
- b. 非特定解釈  $\text{look-for}(\text{John}, \exists x (\text{nurse}(x)))$

### 3.2. 特定解釈と指示対象の「存在」

では不定名詞句の特定解釈と非特定解釈のちがいは、どこにあるのだろうか。それはその表現で指示される対象の「存在」と「非存在」のちがいだとする意見がある。

(21) "Most object-taking verbs in language are implicative with respect to their objects. That is, unless the sentence is embedded under the scope of a [NON-FACT] modality, the truth of the verb implies the referentiality ("existence") of the object." (Givón 1978)

また特定解釈の場合、話し手は特定の指示対象を「念頭においている」とされることもよくある。

(22) (1) Melinda wants to buy **a motorcycle**.

If Melinda has a particular object in mind in sentence (1), the interpretation given to the indefinite is referred to as specific. If her intentions are to acquire a certain **type** of object, the interpretation given to the indefinite is referred to as non-specific. (Ioup 1977)

ところがこれにたいして、特定解釈と指示対象の存在とは無関係だとする見方もある。

(23) "... when the existential quantifier occurs outside the opaque context in the logical representation, existential generalization is assumed to be valid : therefore it follows that on the specific reading, the use of the existential quantifier entails that something of the kind described by the noun phrase exists. This is not always the case. (...) The ambiguities concerning specificity appears to be independent of ontological existence entailments. The distinguishing factor which separates the two readings is that of individuation." (Ibid.)

Alberta believes that a dragon ate her petunias. の不定名詞句 a dragon には、特定と非特定の両方の読みがある。Alberta がどこかの竜が自分のペチュニアを食べたと漠然と考えていれば非特定で、ある特定の竜 Puff, the magic dragon が食べたと考えていれば特定読みになる。Ioup によれば、この読みの区別は、竜の存在に関する ontological existence とは何の関係もない。Alberta が妄想に捕らわれていて竜の存在を信じているが、実際には竜などどこにも存在しないという状況だとしても、上の文で a dragon には特定・非特定の両方の読みがあり、これは「個別化」individuation の問題だというのが Ioup の主張である。

さて、問題の Alberta believes that a dragon ate her petunias. という文に、どのような意味表示が



できるか考えてみよう。

まず特定解釈であるが、存在量化子は最も外側に生じて、believe の不透明文脈の外にある。

(24)  $\exists x (\text{dragon}(x) \wedge \text{Alberta believes} [\text{eat}(x, \text{her petunias})])$

“There is a particular dragon such that Alberta believes that it ate her petunias.”

次も特定解釈である。Alberta はそれが竜だと信じているが、実はそれは竜ではなく他の何でもかまわない。ちなみに Ioup はこの解釈の可能性を考えていないが、十分に考えられる解釈である。

(25)  $\exists x (\text{Alberta believes} [\text{dragon}(x) \wedge \text{eat}(x, \text{her petunias})])$

“There is a x such that Alberta believes that x is a dragon and x ate her petunias.”

次は非特定解釈である。存在量化子は believe の不透明文脈のなかにある。Alberta は竜が自分のペチュニアを食べたと信じているが、それは竜でなくてもよいし、そもそもそんなものはいなくて、ペチュニアは実は風雨でだめになったのでもかまわない。

(26)  $\text{Alberta believes} [\exists x (\text{dragon}(x) \wedge \text{eat}(x, \text{her petunias}))]$

“Alberta believes that there is a dragon and it ate her petunias.”

Ioup は (24) のような特定解釈では、Alberta が特定の竜 (ex. Puff, the magic dragon) を念頭に思い浮かべていればよく、その竜が現実是否存在するかどうかとは無関係であり、特定・非特定の区別は指示対象の「個別化」individuation の問題だと結論している。

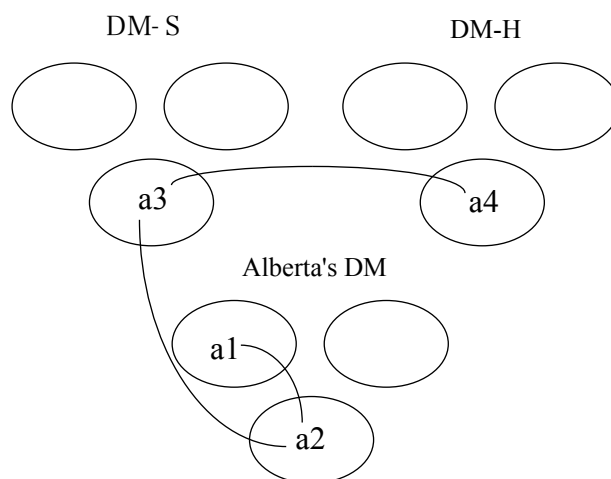
はたして Ioup の主張したように、「存在量化子の意味」と「指示対象の存在の含意」を切り離すべきなのだろうか。メンタル・スペース理論を知るわれわれには、ここにはいささかの誤解があることは自明である。

存在量化子が働く領域は、言語外的現実の世界ではなく、話し手の信念の世界を含んだ談話空間 universe of discourse である<sup>5)</sup>。この談話空間は談話モデルがその存在を想定している心的空間と一致する。従って特定解釈にともなう存在量化子が働くのは、現実世界ではなく談話モデルの内部であるということになる。

では問題の竜が談話モデルでどのように表示されるかを見てみよう。まず特定解釈である。

(27) Alberta believes that a dragon ate her petunias.

$\exists x (\text{dragon}(x) \wedge \text{Alberta believes} [\text{eat}(x, \text{her petunias})])$

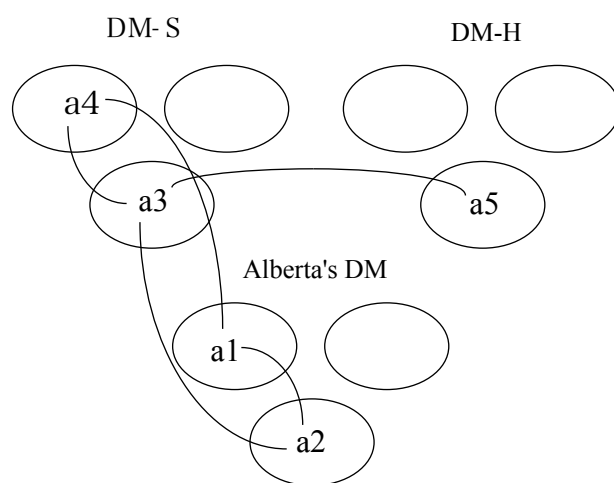


5) Olsson-Jonasson (1984)

a1 は Alberta の共有知識領域 (= 信念の世界) にある「特定の」竜 (= ex. Puff, the magic dragon) で、それは Alberta の発言により言語文脈領域に登録される。a2 は話し手の言語文脈領域に対応物を形成し、次に話し手の発言により聞き手の言語文脈領域に a4 を登録する。この場合、話し手は Alberta の発言を単に繰り返して聞き手に伝えただけであり、話し手はその竜の存在を信じていなくてもよいし、現実には竜がいなくてもよい。

しかし、同じ特定解釈であっても、今度は話し手もその竜を知っており、その存在を信じているというケースもある。そのときは次の図式になるだろう。ここでは Alberta が念頭においている特定の竜 a1 は、話し手の共有知識領域の a4 と直接 ID コネクタでリンクされており、両者がともに知っている竜であることになる。ただし、聞き手の共有知識領域にはその対応物がない (= 聞き手はその竜を知らない) ので、話し手は聞き手に報告するときに、a dragon という不定名詞句を用いている。

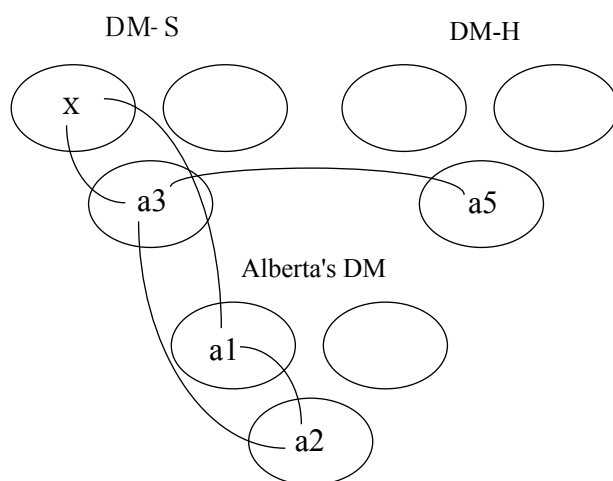
先の解釈と今回の解釈は、形式意味論的にはどちらも特定解釈にすぎず、この区別は論理式では表現できないことに注意されたい。



次はもうひとつの特定解釈である。

(28) Alberta believes that a dragon ate her petunias.

$\exists x (\text{Alberta believes} [\text{dragon}(x) \wedge \text{eat}(x, \text{her petunias})])$



a1 は Alberta の信念の世界での竜であり、話し手は a2 → a3 → a5 と Alberta の発言をそのままに聞き手に伝えているが、実はそれは話し手の共有知識領域では、竜ではない別の x に対応し

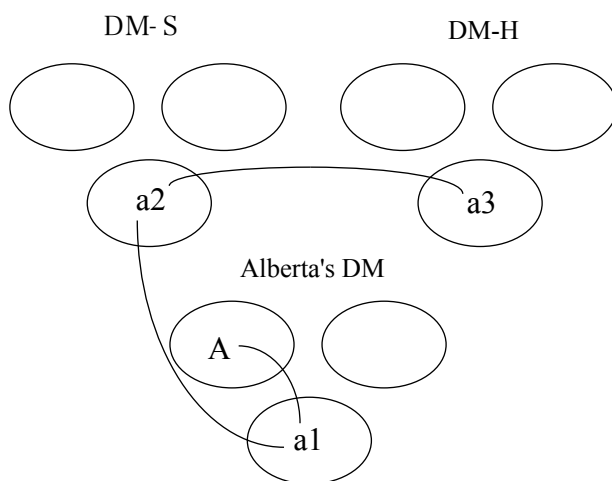
ている。話し手は  $x$  の正体を知っていても、また知らなくてもこの読みは成立する。もちろん逆に Alberta の信じているようにペチュニアを食べたのは本当に竜であり、話し手が信じている  $x$  がまちがいであっても、この読みは成り立つ。

最後は非特定解釈である。

(29) Alberta believes that a dragon ate her petunias.

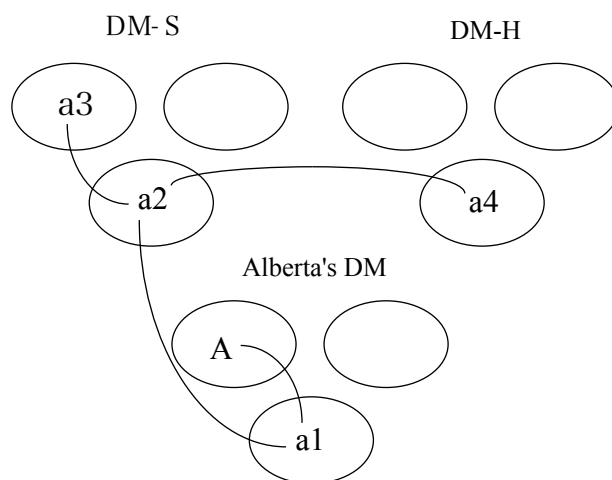
Alberta believes [ $\exists x$  (dragon ( $x$ )  $\wedge$  eat ( $x$ , her petunias))]

この図で今までとちがう点は、Alberta の談話モデルの言語文脈領域に登録された  $a1$  は、Alberta の共有知識領域では特定の個体とリンクされていないという点である。A はここでは dragon のクラス (もしくは類 kind) を表す。Alberta は自分の発話で a dragon という不定名詞句を用いた際に、特定解釈のように token 知識に基づく ID コネクタを使ったのではなく、type 知識による「類・個体コネクタ」<sup>6)</sup> を使ったと考えられる。



このようにして切り出された a dragon (= a1) は、誰の共有知識領域においても、特定の個体とリンクされていない。

実はこの談話モデルに基づく図式を使うと、さらに複雑な読みのケースを考えることも理論的にはできる。



6)この「類・個体コネクタ」は酒井(2000)の「非個体・個体コネクタ」に相当する。非個体・個体コネクタは、同一性コネクタ (=ID コネクタ) よりも指示性において弱いものと考えられている。

Alberta の DM では上と同じく、a1 はクラス (または類) としての竜 (=A) としかリンクされておらず、非特定読みである。しかし、それを報告する話し手の DM では、a2 は特定の a3 (ex. Puff, the magic dragon) と ID コネクタによりリンクされている。これは次のような状況に対応する。Alberta はある朝、庭のペチュニアが荒らされているのを発見する。Alberta はなんらかの理由で、それを竜の仕業だと信じる。Alberta にとってこの竜は非特定のである。しかし、話し手は前の晩に Puff が庭を荒らしているのを目撃し、Alberta の言っている (非特定の) 竜は、実は Puff だとすぐに気づいたという場合である。さて、このような状況で話し手が Alberta believes that a dragon ate her petunias. と発話したとき、この a dragon は特定のそれとも非特定の。Alberta の信念の報告としては非特定のであるが、話し手にとっては特定のとならざるをえない。

しかしこのようなケースまで想定するのは、非現実的かもしれない。理論的には存在する読みであるが、ここまで考える必要はないと思われる<sup>7)</sup>。

さて、ここまでの考察を総合すると、談話モデル表示を用いると、不定名詞句の特定・非特定の区別は、次のようなちがいに対応していることがわかる。

特定解釈では、a dragon の指示対象は、Alberta の DM 内の共有知識領域で、特定の個体 a1 に対応している。

非特定解釈では、a dragon の指示対象は、Alberta の DM 内の共有知識領域で、特定の個体 a1 に対応しておらず、dragon のクラス (あるいは類 kind) とリンクされている。

Ioup は特定・非特定の区別は、指示対象の existential entailment とは関係なく、individuation の問題であるとした。この結論は半分は妥当であり、半分は当を得ていない。individuation はここでは token (= a1) とリンクされているか、それとも type (= A) とリンクされているかというちがいに還元される。一方、指示対象の存在は、言語外的現実の世界で査定されるのではなく、あくまで Alberta の DM 内の共有知識領域において査定を受ける。特定解釈の場合、a dragon の指示対象は Alberta の談話モデルには「存在」しているものであり、これが特定解釈が成り立つ十分条件だということになる。

この結論は、不定名詞句の特定解釈についてよく用いられる「特定の対象を念頭においている」<sup>8)</sup>という規定と同じ方向を指している。ところがこのような言い方があてはまらないケースが存在する。

(30) **A dog** has been rummaging in the garbage can. It has torn open all the plastic bags. (Heim 1982)

Heim が指摘しているように、話し手が朝起きてゴミ缶が荒らされているのを発見し、犬の仕業だと判断してこのような発話をする場合、話し手は特定の犬を念頭に思い浮かべていると言う

---

7) さらにもうひとつの解釈を考えることもできる。Alberta と話し手にとっては a dragon は非特定のであるが、聞き手にとって特定のだというケースである。

8) "If Melinda has a particular object in mind (...), the interpretation given to the indefinite is referred to as specific." (Ioup 1977)

ことはできない。このように共有知識に依存せずに特定解釈される場合もあり、これについては後述する。

#### 4. 特定解釈と作用域

不定名詞句の特定・非特定解釈とよく同一視されることの多いものに、広いスコープ読みと狭いスコープ読みがある。特定・非特定の区別は法助動詞などが作る不透明な文脈で起きるが、広いスコープ・狭いスコープの区別は、不定名詞句が他の量化子や否定などの演算子とスコープ関係に入るときに生じる。

(31) Harvey courts **a girl** at every convention.

a. 広いスコープ解釈

$\exists x (\text{girl}(x) \wedge \forall y (\text{convention}(y) \rightarrow (\text{court}(\text{Harvey}, x, \text{at } y))))$

b. 狭いスコープ解釈

$\forall y (\text{convention}(y) \rightarrow \exists x (\text{girl}(x) \wedge \text{court}(\text{Harvey}, x, \text{at } y)))$

a girl の広いスコープ解釈ではHarvey はすべての会議で同じひとりの女の子に言い寄ることになり、狭いスコープ解釈ではその度ごとにちがう女の子に言い寄ることになる。

Ioup (1977) は特定・非特定解釈と広いスコープ・狭いスコープ解釈が、たがいに独立の解釈であることを示すために、次の例文をあげている。この文の不定名詞句 a witch には4つの解釈があるという。

(32) Everyone believes that **a witch** blighted their mares.

a. specific / wide scope

みんなが特定の一人の魔女を念頭においている場合。They know who she is and they're trying to catch her.

b. specific / narrow scope

それぞれが一人ずつ特定の魔女を念頭に置いている場合。They know who they are and they're trying to catch them.

c. non-specific / wide

特定の魔女を念頭においていないが、一人の魔女が全員の雌馬をだめにしたとみんなが信じている。If they ever find out who she is, they'll try to catch her.

d. non-specific / narrow

特定の魔女を念頭においていないが、一人ずつ別の魔女が自分の雌馬をだめにしたと信じている。If they ever find out who they are, they'll try to catch them.

もし Ioup の主張するように、特定性とスコープ関係が独立のパラメータであるなら、可能な組み合わせは4通りあることになる。

問題はこれがどのように論理式で表現できるかである。ここには、不定名詞句 a witch, 不透明な文脈を生む命題態度動詞 believe、全称量化子 everyone の3つの要素がある。これらの要素は次の条件が満たされなくてはならない。

i) a witch が特定解釈されるには、a witch は believe の作用域の外になくてはならない ( $\exists x > \text{believe}$ )

- ii) a witch が非特定解釈されるには、a witch は believe の作用域の中になくなくてはならない (believe > a witch)
- iii) a witch が広いスコープ解釈されるには、a witch は everyone の作用域の外になくなくてはならない ( $\exists x > \forall y$ )
- iv) a witch が狭いスコープ解釈されるには、a witch は everyone の作用域の中になくなくてはならない ( $\forall y > \exists x$ )
- v) everyone は believe とは作用域の関係に入らないので、everyone は believe の外になくなくてはならない

これを満たすように考えると、次の式を得る。

- (33) a. specific / wide scope :  $\exists x - \forall y - \text{believe}$  の順  
 $\exists x ( \text{witch} (x) \wedge \forall y ( \text{one} (y) \rightarrow \text{believe} (y, [\text{blight} (x, y\text{'s mares} ) ] ) ) )$   
 “There exist a witch such that everyone believes that she blighted their mares.”
- b. specific / narrow scope :  $\forall y - \exists x - \text{believe}$  の順  
 $\forall y ( \text{one} (y) \rightarrow \exists x ( \text{witch} (x) \wedge \text{believe} (y, [\text{blight} (x, y\text{'s mares} ) ] ) ) )$   
 “For everyone, there exists a witch such that he believes that she blighted their mares.”
- d. nonspecific / narrow scope :  $\forall y - \text{believe} - \exists x$  の順  
 $\forall y ( \text{one} (y) \rightarrow \text{believe} (y, [\exists x ( \text{witch} (x) \wedge \text{blight} (x, y\text{'s mares} ) ] ) ) )$   
 “Everyone believes that there exists a witch such that she blighted their mares.”

ここまではよいのだが、c. の非特定・広いスコープ解釈を表す式は書けない。これは当然の結果である。なぜならこの式は次のような矛盾する要請を満たさなくてはならないからである。

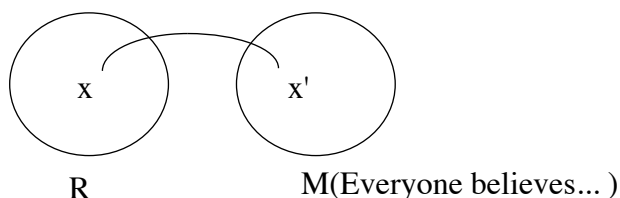
- i) 広いスコープなので  $\exists x > \forall y$  (= a witch > everyone ) でなくてはならない。
- ii) 非特定なので believe >  $\exists x$  (= believe > a witch) でなくてはならない。
- iii) すると believe >  $\exists x > \forall y$  でなくてはならないが、everyone と believe の順序は  $\forall y > \text{believe}$  に固定されているので、believe >  $\exists x > \forall y > \text{believe}$  というあり得ない順序になる。

しかも興味深いことに、Ioup によれば問題の Everyone believes that a witch blighted their mares. という文の最も自然な解釈は、式に書けない非特定・広いスコープ解釈であるという。これが Ioup のパラドックスとして知られる問題である。

### 5. Ioup のパラドックスの解決に向けて

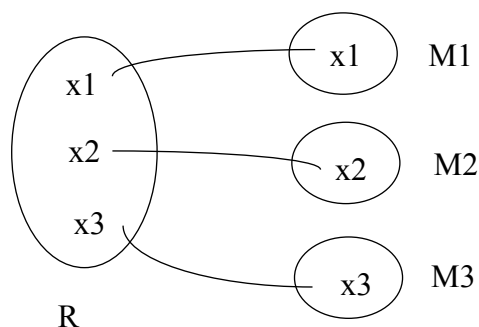
Fauconnier はメンタル・スペース理論によってこのパラドックスを解決しようとした。以下の図では R は現実スペース、M は村人の信念のスペースを表す。

(34) specific / widescope



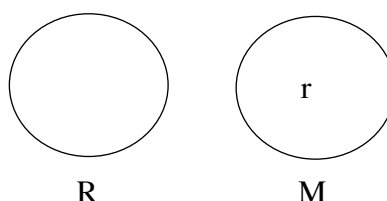
x は現実空間にある a witch に相当する値で、それは村人の信念の空間にも値としての対応物を持つ。

(35) specific / narrow scope



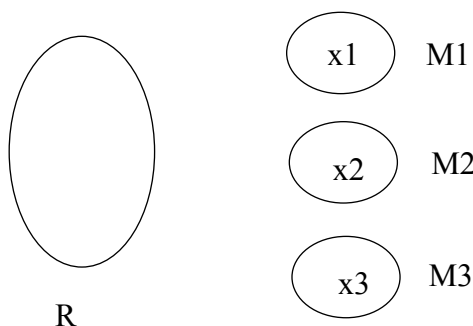
今度は特定で狭いスコープの場合である。村人は信念を共有せず、ひとりひとり異なる空間 M1 / M2 / M3 を持っている。そこに a witch に対応する値 x1 / x2 / x3 が登録されており、それは現実空間 R に対応物を持っている。

(36) nonspecific / narrow scope



非特定・狭いスコープ解釈の図式として、Fauconnier は上のようなものをあげている。村人の信念の空間 M には役割 r が登録され、現実空間 R には対応する値がない。これはメンタル・空間理論における一般的な非特定解釈の図式であり、これでは狭いスコープであることが表現できていない。この点を踏まえて次のようにもできると Fauconnier は述べている。

(37)



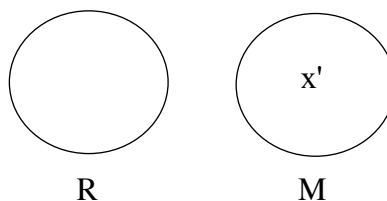
(37)の図は、(36)における役割 r が各人の信念空間 M1 / M2 / M3 のなかで値を取ったものである。これは「ホブはそれをヒルダだと思っており、ノブはブルンヒルドだと確信しており、他のものはそれが誰であるかまったく見当もつかない」<sup>9)</sup> 場合だとされている。

しかしこれはおかしい。非特定解釈では信念空間にあるのは役割 R でなくてはならないはずである。信念空間にあるのが値 x1 であり、「ホブはそれをヒルダだと思って」いるのなら、それは狭いスコープの特定解釈になるはずである。

さて、Ioup が最も自然な解釈とした非特定・広いスコープに、Fauconnier は次の図を当てている。

9) ジル・フォコニエ『メンタル・空間』坂原他訳(白水社) p.78

(38) nonspecific / wide scope



信念スペースには値  $x'$  が登録されているが、現実スペース  $R$  にはそれに対応するものがない。しかし、これもおかしい。この図が表しているのは、「村人が現実には存在しないヒルダという魔女が犯人だと（誤って）信じている」という状況であり、これは実際には「広いスコープ・特定解釈」（のひとつの変種）である。(34) とちがうのは、現実にもその指示対象が存在しないという点だけである。(38) が表さなくてはならないのは、「それが誰だかはわからないが、村人が一致してあるひとりの魔女が犯人であると信じている」状況である。でなくては Ioup のあげる *If they ever find out who she is, they'll try to catch her.* という後続文脈に合わなくなってしまう。

なぜこのような誤解が生じたか。Fauconnier がメンタル・スペース理論を考案したのは、そもそも指示の問題を真理条件意味論から解放するためであった。言語表現と言語外的現実の間にメンタル・スペースというインターフェイスを設けることで、伝統的な「指示する」refer という用語ではなく、言語表現により要素が同定されるという言い方が可能になった。ところが Fauconnier は「現実スペース」を設定したために、自らの理論から放逐したはずの「現実の存在」を再び呼び込んでしまったのである。

Ioup が正しく指摘しているように、不定名詞句の特定解釈と「現実の存在」とは連動していない。現実にも存在していなくても、特定解釈を持ちうる。

次の例を見てみよう。どちらにも特定で広いスコープ解釈がある。

(39) a. Bill believes that **a boy** knocked on every door.

$$\exists x ( \text{boy} (x) \wedge \text{believe} [ \text{Bill}, \forall y ( \text{door} (y) \rightarrow \text{knock} (x, y) ) ] )$$

b. Bill believes that **an unicorn** knocked on every door.

$$\exists x ( \text{unicorn} (x) \wedge \text{believe} [ \text{Bill}, \forall y ( \text{door} (y) \rightarrow \text{knock} (x, y) ) ] )$$

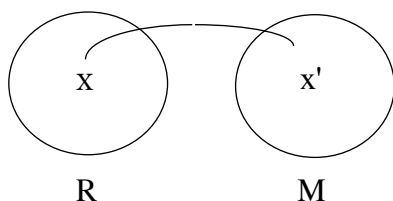


図 A

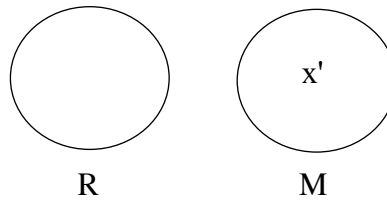


図 B

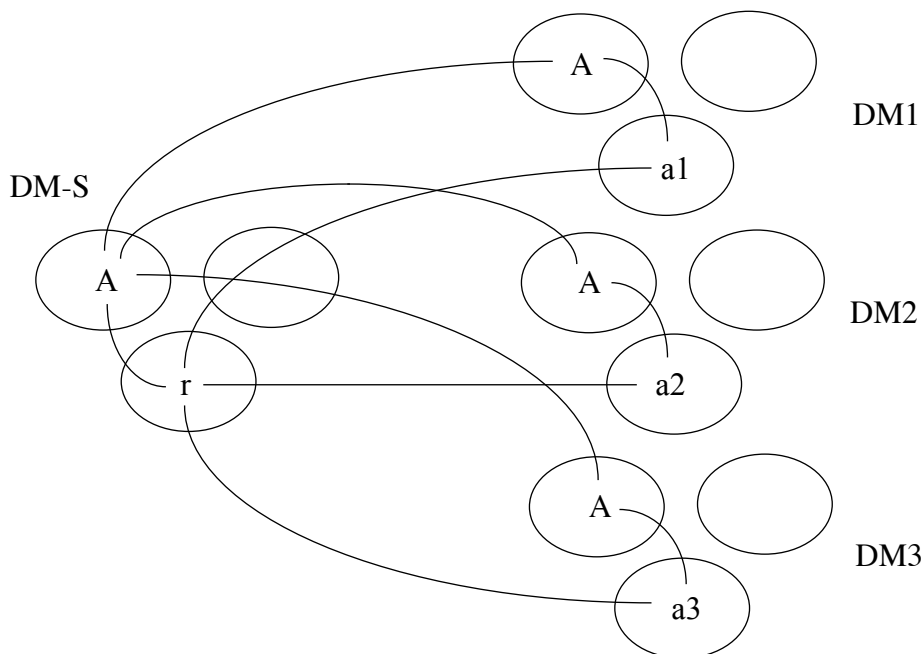
a. では Bill はすべてのドアをノックした一人の少年 (ex. Abel) がいると思っているので図 A に対応し、M における  $x'$  (=Abel) は現実スペースで対応する値  $x$  を持つ。一方、b. では Bill はすべてのドアをノックした一頭のユニコーンがいて誤って信じているので（実際にはドアをノックしたのはホテルのボーイである、あるいは風の仕業である）、図 B に対応することになる。M 中の  $x'$  は現実スペースに対応する値を持たない。しかし、これはどちらも場合も立派な特定・広いスコープ解釈である。

これはどのように解決できるだろうか。ある話し手が *Everyone believes that a witch blighted*



their mares. と発話するにはどのような前提が必要だろうか。私はいかにして村人全員の信念を知ることになるか。たとえば私が村人ひとりひとりにインタビューする必要があるだろう。その結果、ホブは「どこの誰かはわからないが魔女がやったにちがいない」と言い、ノブもまた同じことを言ったとする。この結果得られるのは、非特定・狭いスコープ解釈である。これは談話モデルを用いて次のように表現することができる。

(40)



図が煩雑になるため、話し手がこの文を報告した聞き手の DM-H は省略してある。村人の一人の DM 1 の共有知識領域には、魔女のクラス（または類 kind）を表す A が登録されている。この村人はその type 知識に基づいて、そのクラスの誰か a1（誰かはわからない）が自分の雌馬をだめにしたと信じている（かつ話し手にそう述べた）。もう一人の村人 DM 2 も同じである。ここで重要なのは DM1 / DM 2 / DM 3 の a1 / a2 / a3 はたがいに ID コネクタで結ばれていないという点である。このような状況を踏まえて、話し手は Everyone believes that a witch blighted their mares. と発話するわけだが、この発話に含まれた a witch は a1 とも a2 とも a3 ともリンクされていなくてはならない。つまり値が固定してはならず、潜在的に異なる値を取りうる役割 r でなくてはならない。

では問題のいちばん自然な解釈でありながら、論理式で書けないという「非特定・広いスコープ解釈」はどうなるだろうか。

しかしその前にこの解釈の意味するところをもう一度考えてみよう。非特定ということは「誰かはわからないがどこかの魔女が犯人だ」と村人が考えていることを意味する。一方、広いスコープということは「村人が全員一致してあるひとりの魔女が犯人だ」と考えていることを意味する。しかし、この想定は両立しない。なぜならこの魔女かわからない（=非特定）のに、どうして村人が一致して一人の魔女と考える（=広いスコープ）ことができるのだろうか。

先ほどの話し手がひとりひとりにインタビューするという想定で考えてみよう。私がホブに聞きに行くとホブは「どこかの魔女が犯人だ」と言う。ノブに聞きに行くとノブも「どこかの魔女が犯人だ」という。私はどうやればホブが考えた魔女とノブが考えた魔女が同一人物だと言えるのだろうか。これは不可能な想定である。

唯一可能な想定は、自分の雌馬をだめにされた村人が全員広場に集合し、話し合った結果、

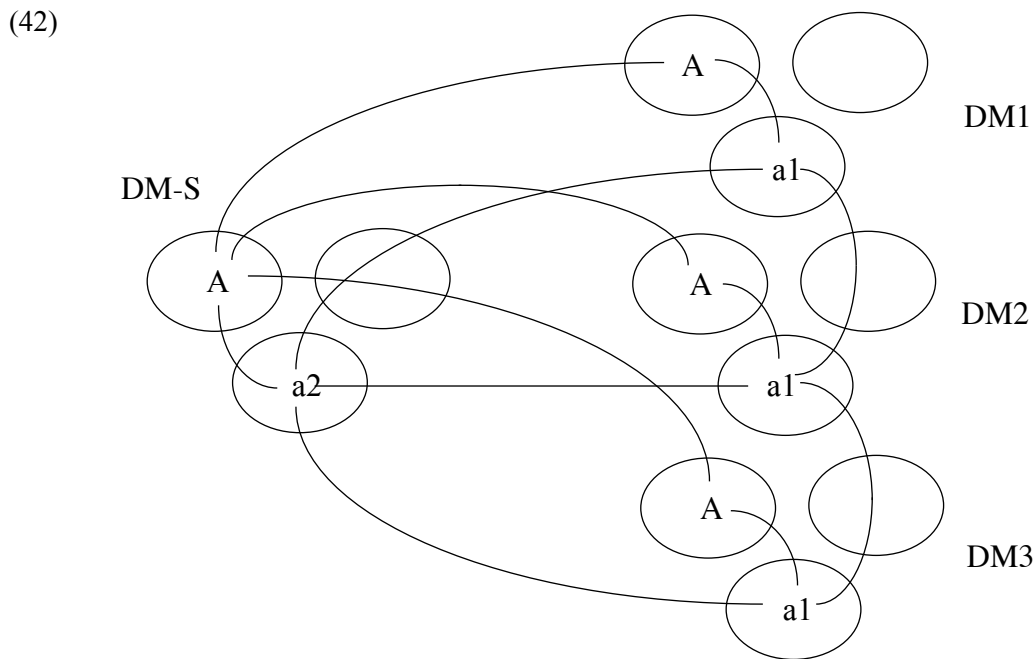
全員一致して「誰かはわからないがどこかの魔女が犯人だ」と結論した場合である。つまりここには村人による「信念の共有」が必要である。そうでなければ「非特定・広いスコープ解釈」は考えることができない。

もし村人全員が信念を共有したとすると、everyone を  $\forall y$  ではなく「集合的個体」とみなすことができる<sup>10)</sup>。これを Y と書くと可能な論理式は次のふたつである。

- (41) a. believe ( Y, [  $\exists x$  (witch (x)  $\wedge$  blight (x, Y's mares) ] )  
 b.  $\exists x$  (witch (x)  $\wedge$  believe ( Y, [ blight (x, Y's mares) ] )

a. は問題の「非特定・広いスコープ解釈」に対応するが、全称量子化子は消去されているので、これは単なる非特定解釈になる。b. は「特定・広いスコープ解釈」に対応するが、これも単なる特定解釈である。

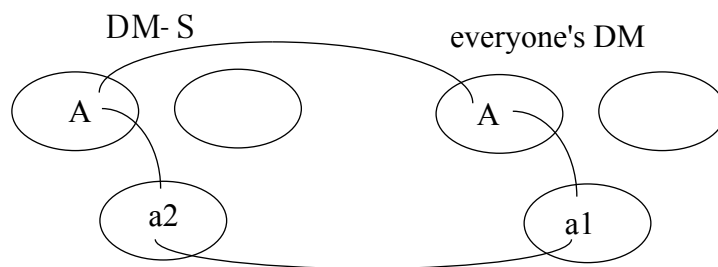
これを談話モデルで表すと次のようになるだろう。村人の DM1 の共有知識領域には魔女のクラス（または類 kind）を表す A が登録されている。村人はこの type 知識に基づいてクラス A に属する要素 a1 を犯人だと思いきや述べる。先に示したように村人同士のあいだでは信念が共有されているので、この a1 は DM2 にも DM3 にも存在し、ID コネクタでリンクされている。話し手である私はこれを受けて、a witch を潜在的に同一の値を取る要素として表現するのであるから、先のケースとはちがいが私が言語文脈領域に持ち出す要素は役割 r ではなく、a1 の対応物の a2 である。



しかし、村人は信念を共有しており、集合的個体と見なすことができるのだから、上の図を次のように縮約しても同じである。

10)集合的個体 set variable は Reinhart (1987) でも用いられている。

(43)



## 6. 特定・非特定再考

### 6.1 特定性のふたつの起源

Corblin (1987) は次の例の不定名詞句 *un homme* には、特定解釈と非特定解釈があるとしている。

(44) **Un homme** est venu à plusieurs reprises.

"A man came many times."

*un homme* が量化表現 *à plusieurs reprises* の作用域の外にあるときは特定解釈、中にあるときは非特定解釈だという。外にあるときには同じ男が何度も来たという意味になり、中にあるときにはその度ごとに異なる男であってもよい。このように Corblin は不定名詞句の指示対象の数が一意的に決まるか決まらないかを、特定・非特定のちがいだとしている。

"L'interprétation *spécifique* est obtenue lorsque l'indéfini donne le nombre de valeurs pour lequel l'énoncé est asserté."<sup>11)</sup>

「特定解釈を得るのは、不定名詞句が文の言明が当てはまる値の数を与えるときである」

しかし、Ioup (1977)でも論じられているように、Corblinのあげている例は、*un homme* と *à plusieurs reprises* の相互作用によって生じる広いスコープ読み・狭いスコープ読みであり、特定・非特定の区別ではない<sup>12)</sup>。

次の例も同じだと考えてよい。

(45) Tous les soirs à 6 heures **un héron** survole notre chalet. (Olsson-Jonasson 1984)

(46) In the old days, John would introduce **a new student** to the chairperson, and Bill would introduce him to the dean. (Chierchia 1995)<sup>13)</sup>

(45) では頭の冠の色・形が独特であるなどの特徴により、話し手が個体同定できる一羽のサギが毎晩飛来するときは広いスコープ解釈になる。そうではなくて、毎晩ちがうサギか飛来す

11)Corblin (1987 : 36)

12) Olsson-Jonasson (1984) によれば、Lyons (1977), Hawkins (1978), Burton-Roberts (1976, 1981) も、同じような例の不定名詞を *nonspecific* としている。

13)Chierchiaはこの例について次のように特定解釈はできないとしている。"Clearly, no natural context for (5) (= (46)) allows for a specific interpretation of the indefinite." (p.3)

るか、個体同定できずみんな同じように見えるサギが飛来するという状況ならば、狭いスコープ解釈になる。

ここで注意すべきなのは、上に述べた(45)の広いスコープ解釈の場合、話し手はそのサギを同定でき、またこの文の発話時にそのサギを「念頭に思い浮かべている」ならば、「広いスコープ解釈」と「特定解釈」は事実上区別できないという点である。

ところが「狭いスコープ解釈」と「非特定解釈」は同じものではない。飛来するサギは毎晩異なる個体なのだが、それは「毎晩異なる」だけであって、「どんなサギでもよい」わけではない。つまり、Corblinの言う「値が定まらない」という場合には、実はふたつのケースがあることになる。

そもそも特定・非特定の両義性は、法助動詞などが生み出す不透明な文脈で起きるものであった。

(47)Bill wants to buy **a bicycle**.

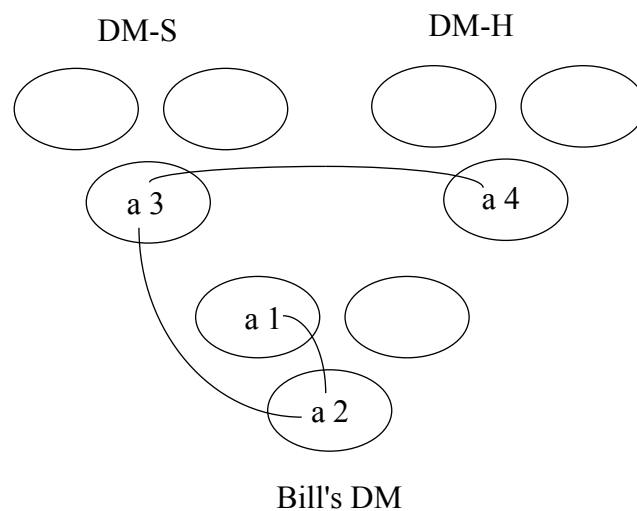
- a. He will buy it tomorrow. [specific]
- b. He will buy one tomorrow. [nonspecific]

特定解釈の場合は、Bill が買う自転車はすでに決まっている。その特定の個体 (= 値) は、文の主語 Bill だけが知っている (= 念頭に思い浮かべている) ことも<sup>14)</sup>、Bill と話し手が知っていることもありうるが、とにかく発話に関与する人のうち誰かの信念のなかで値はすでに決まっている。例えば駅前の自転車屋のショーウィンドウのなかにある Peugeot の赤い自転車と、必要があれば指さして示すことができる。

一方、非特定解釈の場合は、Bill が田舎は不便なのでどれでもいいからとにかく自転車を一台買おうと考えている場合に対応する。この場合、誰の信念の世界でも自転車の値は決まっていない。「自転車と呼ばれるもの」ならば、どれでもいいのである。

このふたつの状態は談話モデルでは次のように表示できる。

(48)Bill wants to buy **a bicycle**.の特定解釈 (1)

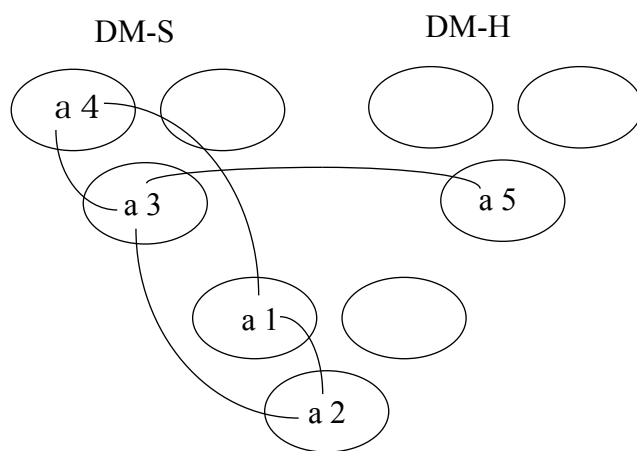


この図は、Bill は特定の自転車 (= a1) を共有知識領域に保持しており、私は Bill の発言を聞いて

14)ただし、この場合話し手はどうやって Bill の信念を知ったのかという問題が生じる。

a2 → a3 → a4 というリンクにより、そのことを聞き手に伝えた場合に対応する。Bill だけが自転車の値を知っており、話し手の私は知らない場合である。

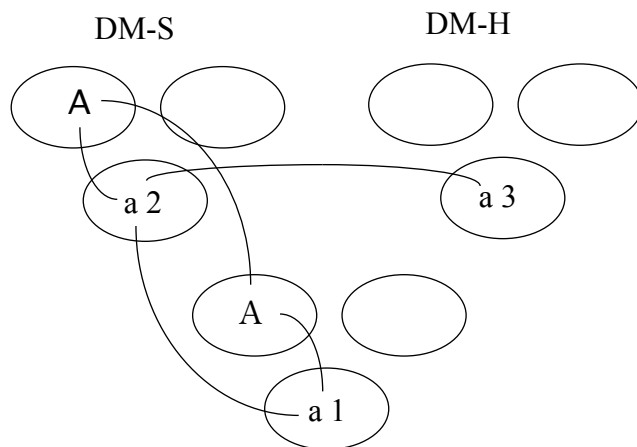
(49) Bill wants to buy a bicycle. の特定解釈 (2)



Bill's DM

この図は、特定解釈のもうひとつのケースで、Bill の共有知識領域にある a1 は、話し手の私の共有知識領域にも a4 として存在し、両者は直接リンクされている。つまり、Bill が買おうとしている特定の自転車を、私も知っているという場合である。

(50) Bill wants to buy a bicycle. の非特定解釈



Bill's DM

この図では、発話に登場する自転車 a1 は、Bill の共有知識領域のなかでは、特定の値にリンクされていない。自転車のクラス（あるいは類 kind）を表し、共有知識領域のなかの百科辞典的知識領域に格納されている A とリンクされているが、このリンクは token に基づく ID コネクタではなく、type 知識によってクラスから個体へと写像する類・個体コネクタである。つまり、a1 は「自転車のクラスに属するある個体」であればどれでもよい。話し手はこの発話を受けて a1 → a2 → a3 と進むことになるが、話し手も a2 を type 知識に基づく個体と認定するのに、自分の共有知識領域に登録されている自転車のクラス（あるいは類 kind）を表す A とリンクを張ることになる<sup>15)</sup>。

特定解釈と非特定解釈の両義性を言語的にあぶり出すためにも最も確実な手掛かりは、照応現象だと言われている。特定解釈の場合は、後続文脈で *it / he (she)* などの定代名詞で照応できるが、非特定解釈の場合はこれらの代名詞で照応できず、英語では不定代名詞 *one* を使う。

(51) **Bill wants to buy a bicycle.**

a. He will buy **it** tomorrow. [specific]

b. He will buy **one** tomorrow. [nonspecific]

フランス語では特定解釈の不定名詞句は直接目的格人称代名詞 *le/la/les* で照応できるが、非特定の場合は中性代名詞 *en* でしか受けることができない<sup>16)</sup>。

(52) **Bill voudrait acheter une bicyclette.**

a. Il va **l'**acheter demain.

b. Il va **en** acheter une demain.

フランス語で非特定解釈の不定名詞句を受ける *en* が中性で性の区別がなく、また数の区別がないことは示唆的である。もし特定の値が共有知識領域に登録されていれば、その値は性と数というカテゴリーを持ったものとして存在するはずである。ところが、非特定解釈の場合、共有知識領域に登録されているのはクラス（あるいは類 *kind*）を表す *A* であり、これは性も数も持たないと考えられる<sup>17)</sup>。

以上のことを考え合わせると、特定・非特定の解釈の両義性と、定代名詞 *il / he (she)* (フランス語では *le / la / les*) で照応できるかどうかの関連は、次のようにまとめることができる。

文中の不定名詞句の指示対象が、文の主語（または話し手）の共有知識領域において、値とリンクされているときは、定代名詞 *il / he (she)* で照応できる。

文中の不定名詞句の指示対象が、文の主語（または話し手）の共有知識領域において、値とリンクされておらず、クラス（または類）とのみリンクされているときは、定代名詞 *il / he (she)* で照応できない。

ここで大きな疑問が生じるかも知れない。次のような発話の場合、不定名詞句はもちろん特定解釈であるが、その指示対象を切り出す場合にも、「男というクラスに属するひとつの個体」と把握されなければいけないので、共有知識領域に登録されているクラス *A* とリンクされ、*type* 知識が発動されているのではないかという疑問である。

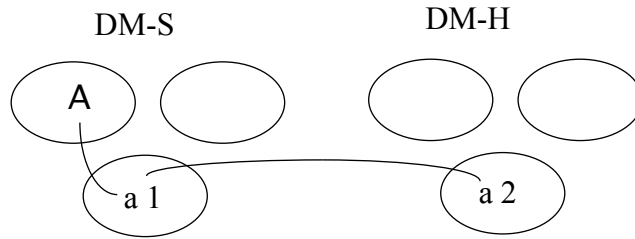
(53) **A man came in. He asked for Bill.**

---

15) もちろん聞き手の DM-H の共有知識領域にも同じ *A* があって同じ操作が行われると考えられるが、ここでは議論に関係しないので省略してある。

16) 特定解釈の名詞を受ける代名詞と、非特定解釈の名詞を受ける代名詞の対立が、フランス語・英語の両方で直接目的語にしか存在しないことは注目すべき点である。これは VP 領域が存在化閉包 *existential closure* を形成することと密接な関係があると思われる。

17) 自転車というクラス（あるいは類）を総称的に表現するときには、*la bicyclette* と女性名詞として実現されるが、これは言語表現の問題である。



話し手が特定の値を思い浮かべていれば、共有知識領域にクラスだけでなく、値が登録されることになる、と切り抜けることができるかも知れない。この例ではa manについて、「話し手が特定の値を思い浮かべている」かどうかはにわかには分からない。

だが、次の例はどうか。両方とも不定名詞句は特定解釈である。

(54)(= 30) **A dog** has been rummaging in the garbage can. It has torn open all the plastic bags.  
(Heim 1982)

(55) There is **a worm** in this apple.

(54)が朝、道に出てゴミ袋が散乱しているのを発見しての発話だとすると、話し手は a dog について特定の値を念頭に置いていたとは言えない。また、(55)がリンゴに虫食いの跡があるのを発見しての発話のとき、話し手は特定の虫を思い浮かべているわけではない。だから (53)でも同じように、「話し手が特定の値を思い浮かべている」から a man が特定解釈だとする必要は必ずしもないのである。話し手が特定の値を思い浮かべていようがまいが、それとは関係なく a man は特定解釈になる。

今まで考察してきた例の多くの場合、不定名詞句が特定解釈されるとき、その指示対象について、文の主語(または話し手)は必要があれば「これ」と名指して、他の事物と区別するに足る個体情報を保持していた。これをインフォーマルに「その対象を知っている」「思い浮かべている」と表現したり、談話モデルでは共有知識領域に登録されていると表現したりした。

ところが、(54)(55)の例から明らかなように、特定解釈の不定名詞句について、話し手は同定に足るほど十分な個体情報を持っていないことも多い。次も同様である。私は帰宅して自分のアパートの壊されたドアを発見し、金品が盗まれていることを知ったが、特定の泥棒を「思い浮かべる」ことは不可能である。

(56)**Un cambrioleur** a forcé la porte de mon appartement.

"A burgler broke the door of my flat."

ではなぜこの不定名詞句が特定解釈になるか。それは自分が被害に遭った「盗難事件」という特定の出来事に関与した泥棒は、たとえ私とその素性を知らなくても、一意的に決定されるからである。

つまり特定解釈の源には二種類あることになる。特定・非特定の両義性を議論するとき、Mary wants to marry a millionaire.のように、法助動詞が作る不透明な文脈において考察されていたために、「特定の人を思い浮かべている」のように知識に基づく同定可能性があげられることが多かったのである。しかし特定解釈の源にはもうひとつあり、それは「特定の出来事に関

与している」ということである。

## 6.2. 知識による「同定」と出来事による「定位」

I want to marry a millionaire. のような不透明な文脈の場合、不定名詞句 a millionaire の特定性の源は、「私には結婚したいと思っている百万長者の恋人がいて、私はその人を念頭に置いてこの文を発話している」という以外にない。このとき、a millionaire の指示対象は私の談話モデルの共有知識領域のなかのエピソード記憶領域に、属性情報 {millionaire} やその他私が彼について知っていること (ex. 名前、出身地、家族関係, etc) を持った個体として登録されている。言い換えればこの不定名詞句が発話のあとで存在前提を獲得するのは (= **the millionaire I want to marry**)、私に知識があり私はその指示対象を知識に基づいて「同定」できるからに他ならない。このとき a millionaire は私にとってのみ特定のであり、聞き手であるあなたにとっては特定のではありません。あなたは a millionaire について個体情報を持っていないからである。ということは、私が I want to marry a millionaire. とするとき、私にとって a millionaire が特定のであろうが非特定のであろうが、聞き手であるあなたにとっては常に非特定のだということである。あなたはその対象を思い浮かべること、同定することもできないからである。従って、I want to marry a millionaire. のような不透明な文脈について論じられる特定・非特定の両義性は、聞き手の立場から見れば存在しないことになる<sup>18)</sup>。

ところが A burgler broke the door of my flat. のようなケースはそうではない。この不定名詞句 a burgler は話し手にとっても聞き手にとっても (その他の誰にとっても)、等しく特定のである。それは特定性の源が a millionaire の場合のように「知識による同定」ではなく、「出来事による定位」にあるからである。

ここで「出来事による定位」という概念を説明しておこう。Danon-Boileau (1989) はこのメカニズムを次のように説明している。例としてあげられているのは、Un étudiant a appelé ce matin pour toi. "A student called you this morning" という文である。

Danon-Boileau によれば、このような出来事文における不定名詞句 un étudiant は存在判定を受けなくてはならない。

(57) "le jugement d'existence correspondant au sujet («un étudiant») est restreint dans le temps.

Dans l'énoncé, l'existence de l'étudiant dont il est question n'est définie par l'énonciateur que pour le moment «t» correspondant à l'«événement» de l'appel téléphonique. En dehors de cet instant, l'existence de l'étudiant n'est pas définie." (Danon-Boileau 1989 : 40)

「主語 (un étudiant) の存在判定は、時間的に限定されている。この文のなかで、問題の学生の存在は、電話があったという「出来事」の時点 t においてのみ定義されている。この時点を離れては、学生の存在は定義されていない。」

次に述語を主語に適用する述語判定の操作がある。

(58) "le jugement d'attribution qui établit le lien entre le sujet et le prédicat est également restreint dans le temps. Il n'est défini par l'énonciateur que pour l'instant «t» de l'appel. Ce «t» est explicité par l'expression «ce matin»." (ibid.)

「述語判定は主語と述語の関係を設定するが、これもまた時間的に限定されている。こ

18) 従って聞き手の側の談話処理という観点を重視する談話モデル理論のような立場からすると、不透明な文脈における特定・非特定の区別は、純粋に語用論の問題である。



の判定は電話があった時点  $t$  に限定される。この  $t$  は文中では *ce matin* (今朝) という表現によって明示されている。」

次にこのふたつの判断には、時間パラメータ  $t$  を用いる順序がある。この例ではまず述語判定が  $t$  を決定し、その  $t$  が主語の存在判定に利用されるという順序である。

(59) “*En fait, pour l’ensemble de l’énoncé, il n’y a qu’une seule restriction temporelle, un seul moment «t» en jeu. Il sert à la fois au jugement d’existence et au jugement d’attribution. Mais cette restriction temporelle est définie dans l’un des deux jugements, puis réutilisée au niveau de l’autre. Dans le cas présent, «t» est défini d’abord au niveau du jugement d’attribution, puis il est réutilisé au niveau du jugement d’existence.*” (Ibid.)

「実際には、文全体としては、ただひとつの時間限定しかない。働いているのはひとつの  $t$  である。この  $t$  は存在判定にも述語判定にも利用される。ただし、この時間限定は、ふたつの判定のどちらかでまず定義され、ついでもうひとつの判定で再利用されるのである。問題の文について言えば、 $t$  はまず述語判定のレベルで定義され、次に主語の存在判定に再利用される。」

要するにこのような出来事文における不定名詞句は、出来事の起きた時点  $t$  においてのみその存在が判定され、それ以外の存在前提を持たないということである。

これはわれわれの考える「出来事による定位」と同じものなのだが、もう少しこれを形式化して表現してみよう。出来事文の述語は局面レベル述語 *stage-level predicate* である<sup>19)</sup>。局面レベル述語はその項構造に状況項  $s$  を持つ<sup>20)</sup>。この状況項は存在量化されることで、出来事文が表す特定の出来事が、ある時点  $t$  において生起したことを表現する。すると Danon-Boileau が長々と論じていることは、次のように簡潔に表すことができる<sup>21)</sup>。

(60) **A burgler** broke the door of my flat.

$\exists s ( \exists x ( \text{burgler} (x, s) \wedge \text{break-the-door-of-my flat} (x, s) ) )$

$\exists s$  は特定の出来事が生起したことを表す。この存在量化子は *burgler* と *break-the-door-of-my flat* というふたつの述語に含まれた状況項  $s$  を束縛する。これにより不定名詞句 *a burgler* は、*break-the-door-of-my flat* という出来事が生起した極小の状況  $s$  において *burgler* として存在判定されることになる。この場合、*a burgler* の存在判定は出来事のみ依存し、話し手が持つ知識 (その属性情報) には依存しない。よってこれは話し手のみならず、聞き手にとっても等しく特定のと解釈されるのである。

ここで名詞述語 *burgler* に状況項を設定するという選択について少し述べておこう。名詞述語は個体レベル述語である。Kratzer (1995) は局面レベル述語にだけ状況項を設定し、個体レベル述語には状況項がないとすることで、いくつかの興味深い現象が説明できることを示した。

しかし、ここでは Kratzer の分析を採用せず、局面レベル述語にも状況項があると考える。

19)局面レベル述語 *stage-level predicate* / 個体レベル述語 *individual-level predicate* については、Carlson (1977) を参照。

20) Kratzer (1995)

21) ここでは *break* のような局面レベル述語だけでなく、*burgler* のような個体レベル述語にも状況項  $s$  を設定する。この必要性については東郷 (to appear) を参照。

個体レベル述語は時間とともに変化しない恒常的特性を表すとされている。しかし、個体レベル述語にも状況項を設けた方がよいことは次の例で示すことができる。

(61) *Je me tuerai plutôt que d'épouser un tel mari.* (Molière, *Avare*)

「私は (こんな男を) 夫とするくらいなら死んだほうがましです」

これは修辞学で *métalepse* 「転喩」と呼ばれている技法である。目の前の男はまだ「夫」ではない。結婚して初めて夫になるのである。このように結果を先取りするのが転喩である。この文には先行詞が欠けているが、仮に *un homme* としておこう。また煩雑になることを避けるために *Je n'épouserai pas un tel mari.* と単純化すると、次のように表せる<sup>22)</sup>。

(62)  $\exists s \exists t [ \exists x [ \text{homme}(x, s) \wedge \text{mari}(x, t) \wedge \neg \text{épouser}(je, x, t) ] ]$

この意味は「今の状況 *s* の男 *x* が、別の状況 *t* では夫であり、その夫と私は結婚することはない」となる。*x* に相当する個体は、状況 *s* では *homme* であり、状況 *t* では *mari* であることに注目されたい。これは同一の個体が、異なる状況においては別々の形容・性格づけを受けることがあるという事実を反映している。同じことは次の例でも起きている。*la femme aux cheveux blancs* 「白髪の女性」と *la jeune fille actuelle* 「今の若い娘」とは、数十年の時を隔てた同一人物である。

(63) *Un connaisseur des êtres humains, la voyant, se serait assurément dit qu'il ne s'agissait pas là de charmes éphémères, mais qu'au contraire la femme aux cheveux blancs retiendrait l'attention de la même façon que la jeune fille actuelle.* (Frank Wedekind, *Le vieux prétendant*)

以上のことを踏まえて、談話世界への不定名詞句の指示対象の「定位操作」を次のように定義する。ただし、*N* は名詞、*P* は述語である。

(64) 不定名詞句は、 $\exists s [ \exists x [ N(x, s) \wedge P(\dots, x, \dots s\dots) ] ]$  の操作を受けるとき、談話世界において定位される。

この操作により不定名詞句の表す *DR* が談話世界に定位されたとき、その不定名詞句は話し手がその指示対象を「思い浮かべること」ができるかどうかにかかわらず、特定解釈される。

### 6.3. 状況の量化と特定解釈

ではもう一度 *Corblin* があげている例を見てみよう。*Corblin* は不定名詞句 *un homme* が *à plusieurs reprises* のスコープ内にあるときは、非特定解釈になると述べていたのであった。

(65) *Un homme est venu à plusieurs reprises.* (*Corblin* 1987)

22) この文には別の表現も可能である。

$\exists s \neg \exists t [ \exists x [ \text{homme}(x, s) \wedge \text{mari}(x, t) \wedge \text{épouser}(je, x, t) ] ]$

この意味は「今の状況 *s* で男である *x* が、夫となり私がその夫と結婚するような状況 *t* は存在しない」となる。

"A man came many times."

次の例も同様である。

(66) Tous les soirs à 6 heures **un héron** survole notre chalet. (Olsson-Jonasson 1984)

"Every evening at 6 o'clock a heron flies over our chalet."

(67) In the old days, John would introduce **a new student** to the chairperson, and Bill would introduce him to the dean. (Chierchia 1995)

これは Corblin の主張するように特定・非特定の対立ではなく、広いスコープ・狭いスコープの対立であることもすでに見た。

問題はこの不定名詞句の狭いスコープ解釈である。(66) を例に取ると、狭いスコープ解釈では毎晩飛んでくるサギは異なる個体であることになる。Corblin はこれを非特定読みだとしたが、これは誤解で狭いスコープ読みである。ではこの読みは特定とも非特定とも取れないのだろうか。

結論から言うところの狭いスコープ読みは、Corblin の主張とは逆に、特定解釈と分析するのが妥当である。その理由は、毎晩飛んでくるサギは異なっていると看做しても、ある晩を取り上げて考えれば飛んでくるサギはひとつに決まるからである。

その意味はこうである。「飛んでくる」survoler は局面レベル述語で、出来事を記述する。その出来事は必然的に時間軸上の特定の時点 t において生起する。時点 t において飛んでくるサギは一羽であり、前節で定義した意味において出来事によって「定位」され特定解釈になる。

次のように表現できるだろう。この式が前節の(64)の定位の定義を満たしていることを確認しよう。

(68)  $\forall t (\text{evening}(t) \rightarrow \exists s (\exists y (\text{heron}(y,s) \wedge \text{fly-over-our-chalet}(y,s,t))))$

ここで直接全称量化されているのは evening(t) である。しかし、すべての晩について  $\exists s$  で示される出来事が生起するのであるから、出来事そのものも全称量化のスコープ内に含まれることによって間接的に量化されている。これを「状況の量化」quantification over situations と呼ぶ。このように状況が量化されると、その状況に含まれる個体変数 (= y) も自動的に量化を受けるため、値が定まらなくなる。このためにあたかも非特定の印象を与えることがあるが、これは非特定読みの不定名詞句とは根本的に異なる性質を持つ。

Karttunen が示したように、must などの法助動詞の作る不透明な文脈で非特定解釈された不定名詞句は、後続の透明な文脈では代名詞 it や照応的定名詞句で照応することができない。

- (69) a. You must write **a letter** to your parents. \*They are expecting **the letter**.  
b. Bill can make **a kite**. \***The kite** has a long string.  
c. Mary expect to have **a baby**. \***The baby**'s name is Sue. (Karttunen, op.cit.)

Karttunen はその理由を、これらの不定名詞句は discourse referent を設定しないからと述べるに留まり、なぜ discourse referent を設定しないかを説明していない。本稿ではその理由を前節の(64)で示したような意味で「定位」されていないからだと考える。

先のサギの例に戻ろう。un héron の広いスコープ解釈では後続文脈で代名詞 il により照応す

ることができる。

(70) Tous les soirs à 6 heures **un héron** survole notre chalet. **Il** fait son nid dans le parc du château.

"Every evening at 6 o'clock a heron flies over our chalet. It makes its nest in the park of the castle."

Corlin はこれを「特定解釈」としたが、代名詞 *il* で受けられることは特定読みであることを裏付けている。discourse referent を設定するからである。

ところが狭いスコープ解釈のときにも代名詞で受けることができるのである。ただし、この場合は代名詞は複数形になる。

(71) Tous les soirs à 6 heures **un héron** survole notre chalet. **Ils** font leur nid dans le parc du château.

"Every evening at 6 o'clock a heron flies over our chalet. They make their nests in the park of the castle."

次の例についても同じである。

(72) a. Harvey courts **a girl** at every convention. **She** always comes to the banquet with him.  
(Karttunen 1968)

b. Most boys in this town are in love with **a go-go dancer**. Mary doesn't like **her** at all.  
(Ibid.)

Karttunen は例 a. の *a girl* には特定解釈と非特定解釈の両方があるが、例 b. には特定解釈しかないと述べている<sup>23)</sup>。ここで Karttunen が特定・非特定と呼んでいるのは、Corblin と同じ誤解のせいで、これは広いスコープ解釈・狭いスコープ解釈のことである。

Ioup (1977) は例 b. にも狭いスコープ解釈はあると主張する。ただし、このとき照応的代名詞は *her* ではなく *them* になる。

(73) Most boys in this town are in love with **a go-go dancer**. Mary doesn't like **them** at all.  
(Ioup 1977)

先のサギの例と並行的であることがわかるだろう。Corblin / Karttunen が「非特定の」と呼んだ解釈の場合も、照応的代名詞で受けることができる。これは discourse referent が設定されていることを示しており、そのとき不定名詞句は「特定の」である。

#### 6.4. メンタル・スペース理論における役割名詞句

メンタル・スペース理論においては名詞句の意味解釈を、役割 (role) と値 (value) というキーワードで説明している。よく使われるのは次のような例である。

---

23) (72) a. の *a girl* の「非特定解釈」(我々の狭いスコープ解釈) のとき、照応的代名詞が複数の *they* にならず単数の *she* であるのは、第一の文の全称量化表現 *every convention* の全称量化が、第二の文の *always* によって引き継がれているからである。

(74) **Le président** change tous les sept ans.

"The president changes every seven years.

le président を役割読みすれば、「大統領は7年ごとに交代する」という意味になり、値読みすれば、「現在大統領である特定の値(たとえば Jacques Chirac)が7年ごとに性格・容貌・服装などの属性が変化する」という意味になる。

井元(2001)はこれ以外に役割読みには次のような変種があるとしている。

(75) a. 全称量化読み

Elle aime bien attacher **son chapeau** avec un ruban.

"She likes to tie her hat with a string."

b. 複合的読み

Chaque année, **le président** distribue deux milliards aux fonctionnaires. (Fauconnier 1984)

"Every year, the president gives civil servants 2 billion."

c. 存在量化的総称

Depuis 1969, l'homme marche sur la lune. (Wilmet 1983)

"Since 1969, man walks on the moon."

d. 特殊な属性読み

Jacques n'aime pas **sa femme**, il aime **la fille du patron**. (Ducrot 1972)

"Jack doesn't love his wife, he loves his boss's daughter."

e. 不特定読み

Ursula veut épouser **un millionnaire**. (Fauconnier 1984)

"Ursula wants to marry a millionaire."

f. 特殊な属性読み

Since I heard that from **a doctor**, I'm inclined to take it seriously. (Partee 1972)

a. で son chapeau は特定の帽子でなく、彼女が持っているどんな帽子でもよい。b. では年度途中で大統領が交代していたとして、大統領Aが10億、大統領Bが10億支出すればこの文は成り立つ。c. で l'homme は特定の個人をさすのではなく役割としての人類をさす。d. で sa femme と la fille du patron は同じ値を持つが、Jacques が愛しているのはその役割としての側面である。e. は不透明な文脈での非特定読みである。f. では私はそのことをある個人 (ex. Brown) から聞いたことが重要なのではなく、医者という属性を持つ人から聞いたという点が重要なので、これも役割読みとされる。

井元は以上の役割読みに共通する特徴を次のようにまとめている。

(76)  $f$  を役割、 $M_1, M_2$  を異なった  $f$  の成員を限定するスペースとすると、役割解釈では  $f(M_1)$  と  $f(M_2)$  を区別しない。

ここでは役割  $f$  は関数とされていて、そのパラメータとしてスペース  $M$  を取り、 $f(M)$  は特定の値を与える。上の定式化は名詞句の役割読みとは、たとえ異なる値が与えられることがあるとしても、その値のちがいを捨象する読みということの意味する。

**Le président** change tous les sept ans.の役割読みでは、 $f(M_1) = \text{Mitterrand}$  と  $f(M_2) = \text{Chirac}$  を区別せず「大統領」という名詞を用いている。全称量化読みでは  $\text{son chapeau}(M_1) = \text{去年買った麦藁帽子}$ 、 $\text{son chapeau}(M_2) = \text{彼にもらったクロッシユ}$  を区別せず、彼女が持っているすべての帽子をさす。複合読みでは年度途中で大統領が交代するが、 $f(M_1) = \text{Mitterrand}$  と  $f(M_2) = \text{Chirac}$  を区別せず「大統領」という名詞を用いている。存在量化読みでは、 $\text{homme}(M_1) = \text{Armstrong}$ 、 $\text{homme}(M_2) = \text{Brown}$  を区別せず、 $\text{homme}(M_1)$  の偉業を  $\text{homme}(M_2)$  にも当てはまるものとしている。

以上が井元の議論である。

これにたいして東郷 (2001a) では次のような批判を行なった。

「様々な定名詞句（不定名詞句も含まれる）を一括して「役割」解釈と総称するのは、役割という概念にあまりに大きな負荷を課すことになり、値 (= 個体同定) でないものはすべて役割であるということになりかねないのではないだろうか。それでは役割は waste basket になってしまう。」

この批判は今でも有効である。井元の分析による「役割」名詞句は、非常に雑多な性格の名詞句を含んでおり、「値のちがいを考慮しない」という共通点によってひとつの範疇にまとめるには問題が多い。また井元の分析と本稿の分析では、名詞句の意味解釈に関して異なる予測を生むことになる。

まず前節で問題にした例文 *Tous les soirs à 6 heures un héron survole notre chalet.* の不定名詞句 *un héron* を考えてみよう。これは井元の分析に従えば役割解釈になる。おとといの晩 ( $M_1$ ) に飛んできたサギと、昨日の晩 ( $M_2$ ) に飛んできたサギを区別しないからである。しかし、これはわれわれの分析では特定解釈であることはすでに見た。一方、*Ursula veut épouser un millionnaire.* のように、不透明な文脈で生じる非特定解釈も井元の分析によれば役割解釈である。

ということは、井元の分析と本稿の分析は、次のように両立しない。

	井元 (2001)	本 稿	備 考
<i>un héron</i>	役割解釈	特定解釈	透明な文脈での狭いスコープ解釈
<i>un millionnaire</i>	役割解釈	非特定解釈	不透明な文脈での非特定解釈

特定解釈と非特定解釈とが、両方とも役割解釈であるという結論には問題が多い。このように井元と本稿の分析は、異なる予測をすることになる。

この問題を照応的代名詞を手掛かりに考えてみよう。不透明な文脈における非特定解釈の不定名詞句は、後続文脈が透明なとき代名詞による照応ができない (Karttunen 1976)。

- (77) a. Ursula wants to marry **a millionaire**. \***He** lives in London.  
 b. Mary expects to have **a baby**. \***Her** name is Sue.

ところが前章で見たように、*un héron* は代名詞で照応できる。

- (78) *Tous les soirs à 6 heures un héron survole notre chalet. Ils font leur nid dans le parc du*

château.

Karttunen が言うように、照応可能性をその不定名詞句が談話世界に discourse referent を設定するかどうかの基準と見なすならば、un héron は discourse referent を設定するが、a millionaire は 透明な文脈には設定しないとせざるを得ない。このように discourse referent の設定という観点から見るならば、un héron と un millionaire とは異なる振る舞いを見せるのであり、井元のように両方とも等しく役割解釈と一括して考えるのは、両者の細かい性格のちがいを無視したあまりにおおざっぱな議論と言えらるう。

また井元があげているその他の役割読みにおいて、代名詞照応の可能性にはかなりのばらつきがあることにも注目したい。代名詞照応が確実にできるのは特殊な属性読みである。この例では不定名詞句 a doctor が discourse referent を設定することは、過去の出来事を記述している文の内容からも明らかである。

(79) Since I heard that from **a doctor**, I'm inclined to take it seriously. **He** said to me that....

これに対して全称量化読みでは代名詞照応は難しい<sup>24)</sup>。

(80) Elle aime bien attacher **son chapeau** avec un ruban. ??Elle **le** garde dans son armoire.  
"She likes to tie her hat with a string. ??She keeps it in her wardrobe."

典型的な役割読みとしてあげられることの多い次の例では照応が問題なくできる<sup>25)</sup>。

(81) **Le président** change tous les sept ans. **Il** est élu au suffrage universel direct du peuple.  
"The president changes every seven years. He is elected by people's direct election."

存在量化的総称も照応できる<sup>26)</sup>。

(82) Depuis 1969, **l'homme** marche sur la lune. **Il** a été ainsi affranchi de la pesanteur de la terre.  
"Since 1969, man walks on the moon. He is now free from the gravity of the earth."

---

24) もちろん彼女がひとつしか帽子を持っていないときは、le による照応が可能である。これは井元の分析では値読みに対応し、ここで問題にしている全称量化読み「持っている帽子すべて」ではない。ちなみに全称量化読みの場合でも、サギの例とは異なり複数の les による照応は難しいと思われる。その理由はサギの例では tous les soirs 「毎晩」という量化表現により明確な状況の量化が起きているのにたいして、この例文には量化表現がなく状況が量化されていると見なせないためである。ならばなぜ son chapeau に全称量化読みがあるのかという新たな疑問が生じる。ここでは詳述することはできないが、son chapeau は持ち主 (elle) との所有関係において浅く同定される Functionals であるためだと考えることができる。Functionals の存在論については Löbner (1985), Fraurud (1996), 東郷 (2001) を参照。

25) この文の le président が果たして役割名詞句なのかどうかという点については疑問が多い。述語動詞が changer という値変化を意味する変化動詞であるために、そのような印象が強まっているが、述語を変えて Le président détient un grand pouvoir. とすれば、その印象はかなり弱まる。

26) 「存在量化的総称」という用語は不適切である。このタイプの文は類 (kind) を表す名詞 l'homme について特定の時点に生じた出来事を陳述するものである。類は個体 (individual) であり、照応的代名詞 il で受けることに何の問題もない。

もし Karttunen が考えているように、代名詞照応をその名詞句が discourse referent を設定するかどうかの基準として用いるならば、井元のあげるさまざまな役割読みはこの点に関して、かなり性格の異なった名詞句の用法を役割読みの名のもとにまとめていると考えざるを得ないのである。

## 7. おわりに

本稿では名詞句の解釈としてあげられる「特定・非特定」「広いスコープ読み・狭いスコープ読み」「de res/ de dicto」などの区別が、談話モデルを用いてどのように表示できるかを示した。いずれの場合にも話し手の談話モデルと聞き手の談話モデルという、非対称的なモデルを想定することにより、名詞句のさまざまな意味解釈を無理なく説明することができる。

また本稿では特定性の源には二種類あることを示した。ひとつは話し手が個体について属性知識を保有していることが対象同定の決め手となっている場合、もうひとつはそのような知識がなくても出来事によって定位される場合である。本稿のモデルのように聞き手による言語処理を重視する立場からすると、前者の知識による特定性は意味論の問題ではなく語用論の問題ということになる。

ここにまとめたのは試論的考察であり、残された問題が多いことは言うまでもない。特に最後の節の代名詞照応は、いわゆるロバ文 Every farmer who owns a donkey beats it. と密接に関係しており、依然として明らかにされていない点が多々ある。最後に未解決として残る問題について、若干の指摘をしておこう。

Fauconnier は不透明な文脈における非特定読みを役割解釈としていることはすでに述べたところである。Karttunen によれば、後続文脈が透明なときには代名詞照応ができないとされている。次の a. では後続文脈は透明であり、b. は must の不透明な文脈は後続文でも have to によって継続されていて、不透明である。このように非特定名詞句は法助動詞が開いた modal な世界が連続している限り、discourse referent として働く。

- (83) a. Seymour wants a **knife**. \*It is sharp.  
b. You must write a **letter** to your parents. It has to be sent by airmail.

Fauconnier (1984) は次の文の非特定名詞句に関して、代名詞照応の可能性を次のように示している。

- (84) Ursula wants to marry a **millionaire**. Sometimes **he** is a Brazilian yachtsman, and sometimes **he**'s a Russian polo-player.

代名詞 he にはふたつの解釈ができる。まず he を単純に役割読みした場合、Ursula の願望のなかで思い描かれている結婚相手が、ある時はブラジルのヨットマンで、ある時はロシアのポロ選手だという意味になる。第二の文はこのとき第一の文の不透明な文脈を引き継いでいる。

もうひとつの読みでも he は役割読みだが、スペース  $S_1$  sometimes ではブラジルのヨットマンという値を与え、スペース  $S_2$  sometimes ではロシアのポロ選手という値を与えるとされている。このときヨットマンとポロ選手は現実世界に値を持つ存在である。

Fauconnier の観察が正しいとするならば、Karttunen の考えた代名詞照応の可否と discourse referent の設定の関係は、もう少し複雑な問題だということになる。

Fauconnier の例文については、いくつか考察すべき点がある。果たして彼の言うように第二



の読みでも he が役割読みなのかどうかは議論の余地があるだろう。he を値読みと取ることも可能である。また彼の言うように he が役割読みであったとしても、後続文がコピュラ文であるという事実も考慮しなくてはならない。Fauconnier 自身も強調しているように、コピュラ文は異なるスペースにある要素を結合することがかんたんにできるかなり特殊な文だからである。

定代名詞を用いながらもその都度異なる対象を指示できるという現象は、次の例とも関係がある<sup>27)</sup>。

- (85) a. Elle a vu **une robe** dans la vitrine. Elle est entrée et l'a achetée noire.  
"She found a dress in the show window. She entered and bought it black."  
b. Jean cherchait **une bonne**. Finalement, il l'a choisie Espagnole.  
"John was looking for a maid. Finally, he choose her Spanish."  
c. Elle avait envie d'**un café**. Elle **le** prit double, crème et avec des croissants.  
"She wanted to have a coffee. She took it double with creme and croissants."

a. を例にとると、先行詞 *une robe* は特定の不定名詞句であるが、それを受ける代名詞 *la* はその *robe* そのものではなく、その型の *robe* をさしている。彼女はショーウィンドウに展示されていたドレスそのものではなく、同じ型で色違いのものを買ったのである。つまり先行詞は token 読みだが代名詞は type 読みであり、先行詞と代名詞のあいだに読みの不一致が起きている。b. c. は先行詞が非特定名詞句だというちがいはあるが、同じことが観察される。

この例のおもしろい点は、後続文はすべて二次述語 (second predicate) を持つという点である。この例を指摘した Olsson-Jonasson はこの点にまったく触れていないのだが、後続文が二次述語を含まないとこのような読みの不一致は起きないと思われる。

知覚動詞と二次述語を持つ次のような構文では、英語でもフランス語でも二次述語は局面レベル述語でなくてはならず、個体レベル述語は許容されないことが知られている。

- (86) a. Je vois Pierre qui fume.  
"I see Peter who is smoking."  
b. \*Je vois Pierre qui fume habituellement.  
"I see Peter who smokes habitually."  
c. \*Je vois Pierre qui est {grand / chauve}. (Benzakour 1984)  
"I see Peter who is {tall / bold}."  
(87) a. I saw John crying.  
b. \*I saw John tall. (Chierchia 1995)

その理由は、知覚動詞が特定の局面を切り出し、その目的語 *Pierre* は局面レベルの存在となるため、*Pierre* について述定される述語もまた局面レベルでなくてはならないからである<sup>28)</sup>。

ところが (85) の例の述語 *noir / Espagnole / double* は予想に反して個体レベル述語である。な

27) Olsson-Jonasson (1984) なお添えてある英訳は構文を示すためにあえて直訳とした。英語の文としてはたぶんおかしい文である。

28) Carlson 流の書き方をすると次のようになるだろう。

$\exists x \exists y [ R(x, je) \wedge R(y, Pierre) \wedge voir(x, y) \wedge fumer(y) ]$

ただし、*R* は個体 (object) を局面 (stage) に写像する実現関数である。述語 *fumer* のとる変数 *y* は局面であり、*fumer* は局面レベル述語でなくてはならない。

ぜこの場合に限って個体レベル述語が許容されるのかは、説明を要する問題であるが、ここではこの点は棚上げにしておく<sup>29)</sup>。ここで問題にしたいのは、(85) a. を例にとるならば、代名詞 *la* が token の *une robe* を受けていながらも、type 指示というレベルのちがう指示を可能にしているという点である。これは (84) で Fauconnier が *he* の役割を通しての値解釈としているケースと平行的に考えることができる。ただし、本稿ではこれ以上考察することができないので、今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- Benzakour, F. (1984) "Les relatives déictiques", G.Kleiber (ed) *Recherches en pragmatique sémantique*, Klincksieck. 75-104.
- Burton-Roberts (1976) "On the generic indefinite article", *Language* 52-2, 191-196.
- Carlson, G.N. (1977) *Reference to Kinds in English*, Ph. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. Published 1980 by Garland, New York.
- Chierchia (1995) *Dynamics of Meaning*, The University of Chicago Press.
- Corblin, F. (1987) *Indéfini, défini et démonstratif*, Droz.
- Danon-Boileau (1989) "La détermination du sujet", *Langages* 94, 30-72.
- Ducrot, O. (1972) *Dire et ne pas dire*, Herman.
- Fauconnier, G. (1984) *Espaces Mentaux*, Editions de Minuit.
- Fraurud, K. (1996) "Cognitive ontology and NP form", T.Fretheim & J.K. Gundel (eds) *Reference and Referent Accessibility*, J.Benjamins, 65-88.
- Galmiche, M. (1979) "Quelques remarques sur l'exploitation linguistique de la notion de description définie", *LINX* 1.
- Givón, T. (1978) "Negation in language : pragmatics, function, ontology", P. Cole (ed.) *Syntax and semantics 9, Pragmatics*, Academic Press.
- Hawkins (1978) *Definiteness and Indefiniteness. A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, Croom Helm.
- Heim, I. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. Published 1989 by Garland, New York.
- Ioup, G. (1977) "Specificity and the interpretation of quantifiers", *Linguistics and philosophy* 1, 233-245.
- Karttunen, L. (1976) "Discourse referents", J.McCawley (ed) *Syntax and Semantics 7, Notes from the linguistic underground*, Academic Press, 363-386.
- Karttunen, L. (1968) *What do referential indices refers to ?*, Indiana University Linguistic Club.
- Kratzer, A. (1995) "Stage-level and individual-level predicates", G.N.Carlson & F.J.Pelletier (eds) *The Generic Book*, The University of Chicago Press, 125-175.
- Kratzer, A. (1998) "Scope or pseudoscope ? Are there wide-scope indefinites ?", S.Rothstein (ed) *Events and Grammar*, Kluwer Academic Publishers, 163-196.
- Löbner, S. (1985) "Definites", *Journal of semantics* 4, 279-326.
- Lyons (1977) *Semantics*, Cambridge University Press.
- Olsson-Jonasson, K. (1984) "A propos de la distinction spécifique / non spécifique des

---

29)その理由はおそらく主節動詞が *acheter / choisir / prendre* のように、「複数の要素のなかからの選択」を表す動詞であるという点に存すると思われる。

- syntagmes nominaux indéfinis", Kleiber (ed) *Recherches en pragma-sémantique*, Klincksieck.185-213.
- Partee, B. (1972) "Opacity, coreference and pronouns", D.Davidson & G.Harman (eds) *Semantics of Natural Language*, Reidel, 415-441.
- Reinhart, T. (1987) "Specifier and operator binding", E. J. Reuland & G. B. t. Meulen (eds) *The representation of (in)definiteness*, The MIT Press. 98-167.
- Wilmet, M. (1983) "Les déterminants du nom en français : essai de synthèse", *Langue française* 57, 15-33.
- 井元秀剛 (2001) 「メンタル・スペース理論における定名詞句の指示について」『言語における指示をめぐって』(大阪大学言語文化部), 21-36.
- 酒井智宏 (2000) 「名詞句の探索領域とコピュラ文の疑問形」『言語情報科学研究』第5号 (東京大学言語情報科学研究会)
- 東郷雄二 (1998) 「談話モデルと指示」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』(科学研究費成果報告書)
- 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示 - 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」『京都大学総合人間学部紀要』第6巻, 35-46.
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』第7巻, 27-46.
- 東郷雄二 (2001a) 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究第25号』、1-14.
- 東郷雄二 (2001b) 「定名詞句の現場指示用法について」『京都大学総合人間学部紀要』第8巻, 1-17.
- 東郷雄二 (to appear) 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」『京都大学総合人間学部紀要』第9巻.